

京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）表彰式



京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）の表彰式が3月2日（金）、京都大学国際科学イノベーション棟5階シンポジウムホールにて行われました。たちばな賞は、優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰することによって研究意欲を高め、我が国の学術研究の将来を担う優れた女性研究者を育成することを目的として創設され、今回で第10回目となります。

はじめに、今村 博臣広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ主査の司会進行で、男女共同参画推進センター長の稲葉 カヨ理事・副学長より開会の挨拶がありました。

次に、山極 壽一総長よりたちばな賞 学生部門受賞者の森本 千恵氏（医学研究科 博士課程2年）、研究者部門受賞者の石井 美保氏（人文科学研究所 准教授）へ表

彰状と記念楯が授与され、株式会社ワコールの安原 弘展代表取締役社長より副賞の「ワコール賞」が授与されました。続いて、優秀女性研究者奨励賞 学生部門受賞者の華井 明子氏（医学研究科 博士課程3年）、研究者部門受賞者の三宅 可奈江氏（医学部附属病院 助教）へ山極総長より表彰状が、安原社長より副賞が授与されました。続いて、山極総長、安原社長が受賞者へ祝辞を述べました。

その後、たちばな賞学生部門受賞者の森本氏、研究者部門受賞者の石井氏が研究発表を行いました。

最後に、川添 信介理事・副学長より閉会の挨拶があり、表彰式及び研究発表会は盛会のうちに終了しました。



たちばな賞 優秀女性研究者奨励賞 受賞者
たちばな賞（優秀女性研究者賞）

部門	氏名	所属・身分	研究テーマ
学生部門	森本 千恵	医学研究科 博士課程2年	網羅的SNPs解析を利用した実践的血縁鑑定法の開発
研究者部門	石井 美保	人文科学研究所 准教授	西アフリカと南インドにおける宗教・自然・近代に関する人類学的研究

優秀女性研究者奨励賞

部門	氏名	所属・身分	研究テーマ
学生部門	華井 明子	医学研究科 博士課程3年	がん化学療法に伴う副作用を予防する非薬物介入法の開発
研究者部門	三宅 可奈江	医学部附属病院 助教	乳癌の画像診断：PETによる機能診断とマルチモダリティイメージング

“Women and Wish” フォーラム4 女性研究者の働き方・生き方を考える

3月2日（金）、国際科学イノベーション棟会議室 5a・5bにて“Women and Wish”フォーラム第4回「女性研究者の働き方・生き方を考える」を開催しました。基調講演では、大学院法学研究科島田裕子准教授が「働き方改革と女性研究者」と題し、労働時間規制、ワークライフバランス、裁量労働制についてお話しされまし

た。続いてセンターのサービス利用者を代表して、生存圏研究所田鶴寿弥子助教と医学研究科博士後期課程大西龍貴さんが講演されました。その後、女性教員懇話会より「育児・介護と業務の両立に対する女性教員のニーズ」の題で発表がありました。



平成30年度第1期研究・実験補助者雇用制度 利用者決定

平成30年度1期研究・実験補助者雇用制度の利用者は、19名（女性12名、男性7名）の方に決まりました。

研究・実験補助者雇用制度とは出産・育児・介護等で、十分な研究・実験時間がとれない研究者に対し、研究又は実験業務（注：教育関係の業務は支援対象外）を

補助する者の雇用経費を負担するものです。募集は、年2回（6月、12月）です。本事業は、女性研究者に限らず、男性研究者も対象となります。また、研究分野の文系・理系は問いません。補助者未定でも申請できます。

北東北国立3大学連携推進会議連携協議会 男女共同参画シンポジウム

1月17日(水)、秋田大学にて北東北国立3大学連携推進会議連携協議会男女共同参画シンポジウム「これからはずっと輝き続けるためにパートII～多様性を活かす職場環境を考える」が開催され、本学の稲葉 カヨ理事・副学長が「京都大学の女性研究者支援を通じて」と題し、講演を行いました。



平成29年度 ワーキンググループ活動報告

広報・相談・社会連携事業 WG

主査 今村 博臣 (生命科学研究所)

広報事業では、3月2日に Women and Wish フォーラム4「女性研究者の働き方・生き方を考える」を女性教員懇話会との共催で行った。基調講演およびセンター利用者による講演に続いて、総長との意見交流をおこない、京都大学のWindow構想における本センターが果たすべき役割を再確認した。

社会連携事業としては、関西の他大学との連携で第12回女子中高生のための関西科学塾を開催した。京都大学では、11月19日に実験講座を行った。また、12月23日には女子高生・車座フォーラム2017を学内に開催した。両イベントとも多数の高校生および保護者が参加し、次世代の女性研究者としての役割を担う世代に、早い段階から大学の教員や学生と交流する機会を提供することができた。

そして、センターの活動について、ウェブサイトやニュースレターを通して、学内外に広報活動を行った。

就労支援事業 WG

就労支援事業 WG 主査 喜多 恵子 (農学研究科)

本WGの主要活動である「研究・実験補助者雇用制度」については、育児や介護期にある研究者の研究継続支援という目的に即して、アンケートなどに示される利用者の声も考慮しながら、毎年、少しずつ改良を加えてきている。本年度中の実績は、第1期で応募者34名、利用者17名、第2期で応募者34名、利用者16名と、時期により変動はあるもののここ数年増加傾向にある。予算の制約のなかで、応募者が困難な状況にあることがわかりながら十分な支援ができないケースも増えてきている。また、ここ数回の傾向として、特任教員・研究員など比較的短い任期で京都大学に所属している研究者、特に外国人研究者からの応募が増加している。不安定な雇用、慣れない土地、家族からの援助も望めない、という状況のなかで育児や介護と研究の両立に苦慮されてい

る男女研究者も多い。

雇用形態の変化や教員のダイバーシティ拡大に適応した制度とその運用の見直しも、制度全体の拡充とともに今後の課題である。

育児・介護支援事業 WG

主査 小西 由紀子 (理学研究所)

当ワーキンググループは京都大学構成員の育児と介護に関する支援活動を行っています。今年度も4月に男女共同参画推進センター内に待機乳児保育室を開室いたしました。ここでは京都大学の学生・研究者を対象として、認可保育所に入所できなかった生後15ヶ月までのお子さんをお預かりしています。近年京都市に認可保育所が相次いで開設されていますが、依然として年度途中での保育所入所は厳しいもようで、保育室の利用者数は2月、3月には定員18名に達する見込みです。

病児保育事業 WG

主査 足立 壯一 (医学研究所)

京都大学男女共同参画推進センター・病児保育室「こもも」(以下、病児保育室)は、京都大学に在籍する全ての教職員・学生の子供(生後6ヶ月から小学校3年生)を対象とし、急な疾病により保育園/幼稚園、小学校などに通うことの出来ない病中病後児の保育を行っています。事前登録制による運用で、登録者数はのべ1,016名、うち平成29年度の新規登録者103名と年々増加しています(平成29年12月末現在)。定員は5名(感染隔離室1名を含む)であり、平成29年度は809名の利用がありました(平成29年12月末現在)。利用状況は感染症の流行に大きく左右されており、定員を上回る利用希望のために断わらざるを得ない日が続くこともしばしばみられますが、利用者からは概ね良いご意見をいただいています。また、今年度も京大病院オープンホスピタルでのポスター掲示やホームページ等を通じての広報活動も継続して行いました。

連載：研究者になる！－第64回－

大きくなったら何になりたい？

農学研究科・教授 北島 薫

今年の初め、男子のなりたい職業の第1位は、野球選手やサッカー選手を超えて「学者・博士」だという某調査の結果が報道されました。そのとき、「女子は？」とか「なぜ男子のなりたい職業は報道されるけれど、女子のは報道されないのだろうか」、など、ムカっときました。この原稿を書くにあたり調べたら、小学校6年生までが対象のこの調査で女子の第1位は「食べ物屋さん」で、「学者・博士」は9位までに入っておらず残念です。私は、多分小学校の高学年ごろから、「人の能力は、男女の違いよりも個人差の方が大きい」という考えをはっきりもち、科学者になりたいと思っていました。ですから、私が研究者になるに至った根源は、さらに前に遡ります。

私の父は石油化学の技術者で、母は高卒で英文タイプを学び、二人は高度成長期の瀬戸内海の大コンビナート建設時代に職場で知り合いました。母は結婚後退職し専業主婦として、子育てに専念しました。同じ年に社内結婚などをしたカップル約40組ぐらいが揃って写っている記念写真があり、その人たちの子供たちと社宅で一緒に遊んで育ちました。ただ、「私も入れて」と、遊んでいる他の子供たちに自分から言い出せず、誰かが声をかけてくれるまでそばに立って見ている子供でした。ところが、小学校にあがると、「勉強はとても面白く、自然にできてしまう」、ということが判明し自信がつけました。両親（もちろん、仕事で夜遅くにしか帰らない父ではなく多くの場合は母）がたくさん本を読んでくれたのが、学力の下地になりました。小学校の高学年になる頃に、京葉コンビナートの建設のため父が転勤になったので、千葉の市原市に引っ越しました。その頃は、田んぼだらけの田舎で、学校の帰りに収穫後のつるに残っているえんどう豆を摘んで家に持って帰ったのがとても嬉しかったのを覚えています。中学受験とかには縁遠い環境で、親から「勉強しなさい」と言われた記憶が皆無です。成績は体育以外はダントツでしたので、「女子だから」というような制限をかけるアホな大人もいなかったのだと思います。授業中は退屈してノートの余白に落書きばかりしてました。数学などは最初の2ヶ月ぐらいで教科書を自習してしまっていたので、先生の許可のも

と参考書の問題を解いてました。この数学の先生は担任だったのですが、卒業前に「普通の人になるな」と言ってくれました。多くの男子からは補導で厳しいと怖がられていた男の先生です。一方、化学担当の女の先生は、「科学者になるのはいいけれど、化学はやめたほうがいい」と言いました。危険な薬品を扱う事もある分野は将来子育ての可能性もある女性にはちょっとね、というような説明でした。これには内心反発しましたし、今でも女の先生がそのような考えだったことが残念です。いずれにせよ、私はその頃には、生物学者になることを決めてました。

高校は男女比が1:1の進学校でしたが、運動音痴に挑戦すべくテニス部に入ったり、古典クラブで万葉集を議論したり、おしゃれな東京女子の多くとはどうもソリが合わない以外は楽しかったです。私が東大に入ったのは、女子新入生の総数が初めて200人を超えたという年でした。女子トイレの数が少なくて、講義と講義の間の休憩中に走り回ってました。男子のほうが話が合う人が多い、ということに気づけて大学は謳歌しました。私自身、女性差別の壁に直面した記憶はありません。でも、数学者になりたかった友人は、「女は数学者にはなれない」、と大学院の面接で教授に言われて憤慨し別の大学の医学部に進学しました。高校時代から暇があったら大学レベルの解析問題を楽しんで解いていた彼女が数学者になったらどうなっていただろう、と今でも時々思います。私自身は「もし、英語で考えて英語で議論したら違う物が見えてくるのだろうか」、という素朴な疑問からアメリカに留学し、あとは流れに乗って研究者になる道を歩き、29年後に帰国して京都大学に就職しました。研究者になることのエッセンスは男女共通です。「他の人と違うことは長所」、「他の人の嘘を見抜き検証すること」、「他の人の見えないものを見えるようになり、それを説明すること」、というのが私の信条です。あと、私の趣味のひとつは手元にあるものを活用してレシピを開発し、見かけは悪いけど美味しい洋菓子を作ることです。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>